



## 「知らない」を「知る」ことで

刈谷市立雁が音中学校3年 岡田 亜希穂

「ここにいる人たちは、全員が全員生まれつき障害があったわけではないんだよ。」

この言葉は、私に大切なことを教えてくれた言葉だ。

中学二年生の冬、私は職場体験で障害者施設にお世話になった。将来の夢は決まっていないが、昔から人のために動くことが大好きだった。数ある職業の中で、実際に人と関わり、やりがいを感じることができそうな福祉分野には、とても興味があったのだ。

体験初日、目の前に広がった光景には目を丸くしてしまった。何十台も並ぶ車イス、何と言っているのか分からない言葉、体を自由に動かさなくて寝たきりの方……。一人の利用者の方から腕を捕まれ、強く引っ張られたときには「怖い」という感情さえ生まれた。それはまるで、未知の世界に足を踏み入れたような感覚で、どのように向き合っていけばいいのか分からなくなっていた。さらに、この日に私が担当した方の言葉は、発音が曖昧で聞き取ることができず、全くサポートすることができなかった。相手が何を考えているのか、どんなことを私にしてほしいのか、自分が手伝おうとしている行動は正しいのか。考えれば考えるほど分からなくなると、足が動かなくなりそうだった。その結果、お互いに緊張してしまい、打ち解けられないまま時間だけが過ぎていった。

施設の一日は朝の会から始まり、仕事、昼食、自由時間、帰りの会と流れていく。仕事は、手芸品作りやお菓子のラベルの色塗りをする。それを販売して得たお金がお給料となる。昼食は、それぞれの人に合わせて量や形は違うけれど、みんな同じ物を食べていた。飲み込む力が弱い方が食べるペースト状の介護食は、形は全くの別物のようだが、食べると私たちが食べていたものと同じ味がして驚いた。見た目は違っても中身は同じだということが、とても印象に残った。

初日を終え、一日の振り返りをしていたとき、私はハッとした。今までの私は差別や偏見をしていない「つもり」になっていたのではないだろうか。最初に感じた、未知の世界に入ったようなあの感覚。あれは「車イスがあるから」という、ただそれだけの理由で生まれたのではないだろうか。介護食

を食べたときの驚きも、心のどこかで「形が違うから味も違うだろう」と思っていたから生まれたのではないだろうか。今までの私は、「障害者だから同じ物は食べられない」とでも思っていたのかもしれない。そして、あの言葉を思い出した。

「ここにいる人たちは、全員が全員生まれつき障害があったわけではないんだよ。」

つまり、今までは普通に、いわゆる「健常者」として生きていたのに、事故や病気などで一瞬にして体を自由に動かせなくなった人がいることに初めて気づかされたのだ。もしかしたら、明日私は事故に遭って大ケガを負うかもしれない。そうなったとしても、私は世間から変な目で見られたくない。それなのに私は、差別・偏見をしていない「つもり」になり、頭の中で「障害者」と「健常者」を勝手に分類していた。そんな自分がとても情けなく思った。

なぜ人は勝手に分類をしてしまうのだろうか。それは、自分の知らないことに対して関わりたくない、自分を防衛してしまうからだと考える。実際、施設の中は和やかな雰囲気があった。それは、全員がお互いを理解し合っているからこそ生まれているのだと思った。私も相手のことが理解できると、自然と緊張の糸はするするとほどけていった。最初はうまく聞き取れなかった言葉も、よく耳を澄まして直前の行動に注目することで、だんだんと分かるようになっていた。そして、自分がおこした行動で笑顔が表れたり、「ありがとう。」

と言われると、コミュニケーションが生まれた。そのことがきっかけで、カードゲームを共にしたり、何気ない会話で盛り上がると、信頼関係も築けるようになっていた。

私は、職場体験を通して、自分が思い込みをしていることや先入観に満ちあふれていたことに気付かされた。そして、この経験は私の人生の大切な要素となっている。「障害者」や「健常者」、「普通」などといったこの作文に書いた言葉は、なくなっていくといいなと思う。人を分類しても何も意味がないし、一人一人に「普通」はあるからだ。

この世界には私たちの知らないことが数多く存在する。むしろ知らないことの方が多いかもしれない。そして、誰もが自分らしく、自由に生きる権利を持っている。権利を持つのは私たちであり、権利を守るのも私たち。そうやってお互いに支え合い、知らないことについて知ろうとすることが、誰もが過ごしやすい社会を創る一歩になると思う。